

コンピューター・コーポラ利用による現代英米語法 研究(8) : 'know+NP+(to) Verb' におけるtoの出没に ついて

浦田, 和幸
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/6223>

出版情報 : 言語文化論究. 5, pp.87-93, 1994-03-30. 九州大学言語文化部
バージョン :
権利関係 :

コンピューター・コーポラ利用による現代英米語法研究 (8)

—‘know+NP+(to) Verb’における to の出沒について—

浦田和幸

I

アメリカ英語の言語資料 Brown コーパス (The Brown Corpus) とイギリス英語の言語資料 LOB コーパス (The Lancaster-Oslo/Bergen Corpus) を利用した一連の研究で、今回取り上げるのは、‘know’ が「不定詞付き対格」(‘Accusative with Infinitive’) を伴う ‘know+NP+(to) Verb’ における、不定詞標識 ‘to’ の出沒の問題である。(この一連の研究の目指すところと両コーパスの概略については別稿で述べられているので、そちらを参照されたい。¹⁾)

II

‘know’ が不定詞付き対格を従える ‘know+NP+(to) Verb’ は、‘know’ の意味および ‘to’ 出沒の観点から 2 つに分類できる。両者の特徴を、LDCE¹ (1978) の記述に基づき概観してみよう。

(i) I know him *to be* a fool.

(ii) I've known him $\left\{ \begin{array}{l} \textit{to run} \\ \textit{run} \langle \text{BrE} \rangle \end{array} \right\}$

faster than that.

不定詞部に Be 動詞が起こる(i)の <know+NP+to be> 型では、‘know’ が「…であると認める [知っている]」(‘to accept the fact that...’) という意味を表す。この場合には常に to-不定詞が用いられ、不定詞標識 ‘to’ の出沒に関する英米差は存在しない。一方、不

定詞部に一般動詞が現れる(ii)の <know+NP+(to) do> 型は過去の経験を表すものであり、過去形 (‘knew’) と完了形 (‘have/has/had known’) で起こり、「…するのを見た [聞いた] ことがある」(‘to have seen, heard, etc.’) という感覚動詞的な意味を持つ。‘to’ の出沒に関しては、(i)の場合と異なり、(ii)には英米差が存在する。to-不定詞は英米ともに可能であるが、原形不定詞はイギリス語法に限られる。以上が、LDCE¹ の述べるところである。

小論は、‘know+NP+(to) Verb’ における ‘to’ の出沒とその英米差を明らかにすることを目的とするため、この点で特に興味深く思われる(ii)の <know+NP+(to) do> 型を中心にいくつかの問題点、つまり、アメリカ英語では to-不定詞のみで原形不定詞を用いることはないのか、また、イギリス英語では原形不定詞と to-不定詞がどの程度の割合で現れるのか、などを取り上げる。以下で、英米の辞書・語法書等の述べるところを検討し、次いで、LOB, Brown コーパスによって実際の使用状況を見ることにする。

III

イギリス系辞書の OALD⁴ (1989) は to-不定詞、原形不定詞の双方を挙げるが、英米差を示す地域レーベルはない。LDCE² (1987) の扱いは先に示した LDCE¹ (1978) とほぼ同様であるが、原形不定詞を「主にイギリス英

語で」としている点が注意を引く。このことは、LDCE¹ではイギリス語法と明記された原形不定詞が、実はイギリス英語に限定されることなく、アメリカ英語にも起こりうることを示唆するものと考えられる。

イギリス系語法書等では、Swan (1980, p. 320) は英米差に言及せず to-不定詞と原形不定詞を併記しているが、Close (1975, p.216) と Palmer (1987², p.200) では原形不定詞の例だけが示され、to-不定詞への言及はない。イギリス英語では原形不定詞の方がより一般的ということであろうか。なお、Quirk et al (1985, p.1205) は、上述の LDCE²と同様、原形不定詞が主としてイギリス英語に限られるとしている。

アメリカ系辞書で <know+NP+(to) do> 型に言及するものは特に見当たらない。語法書等では、Curme (1931, p.124) に、原形不定詞、to-不定詞ともに可能であるが注意深い言葉遣いでは特に to-不定詞を用いるとあり、さらに、原形不定詞より to-不定詞の方が一般的であるという注記も見られる。²⁾ また、Evans & Evans (1957) は、原形不定詞、to-不定詞の双方を認めた上で、to-不定詞の方が好まれると述べている。両者の意見を総合すると、アメリカ英語では to-不定詞、原形不定詞ともに可能だが、to-不定詞の方が一般的であり、特に(注意深い言葉遣いが要求される)書き言葉においてその傾向が強いと言えそうである。以上、<know+NP+(to) do> 型における不定詞の形態に関し、イギリスとアメリカの辞書・語法書等が説くところをそれぞれに概観したが、共著者が英米双方にまたがる BBI (1986) は原形不定詞をイギリス語法とし、一方、to-不定詞に対しては地域レベルを付けていない。

なお、<know+NP+(to) do> 型の受け身 (e.g. 'He's sometimes *been known to sit there all day*' [OALD⁴]) では、常に to-不定詞が用いられ、原形不定詞が生起することは

ない。このことは英米の辞書・語法書等が等しく認めるところであり、'to' の出沒に関する問題はない。³⁾

ところで、先にも触れた通り、LDCE¹は <know+NP+(to) do> 型が過去形と完了形に限定されるとしているが、同様の注記は、イギリス系辞書では LDCE²、OALD⁴にもある。しかし、語法書等では、Swan (1980, p. 320) が完了形に限られるとし、また、Quirk et al (1985, p.1205) は原形不定詞が用いられる <know+NP+do> 型に関して、主として完了相に限られると述べている。⁴⁾ アメリカ系辞書・語法書等で時制とのかかわりについて特に言及したものは見当たらないが、アメリカ人著者も加わる BBI では、イギリス系の LDCE^{1,2}等と同様、過去形と完了形に限定されるとしている。以上のことから、経験を言い表す <know+NP+(to) do> 型は現在形で生起することはなく過去形と完了形に限定され、普通は完了形が用いられると考えられる。

(ii)に示した LDCE¹の例が肯定文であることにも注意を喚起しておきたい。Palmer (1965, p.169) は、<know+NP+(to) do> 型が起こるのは 'ever' を含む疑問文、'never' またはその他の疑似否定語を伴う否定文に限定されるとしているが、肯定文の例である(ii)はこの見解に反する。しかも、イギリス系辞書・語法書等の LDCE²、Quirk et al (1985, p.1205)、アメリカ系語法書の Evans & Evans (1957)、また、BBI が挙げる例も肯定文である。実際には肯定文の例が存在し、Palmer (1965) の見解が行き過ぎであることは Visser (1973, §2079) の指摘するところでもあったが、Palmer (1965) の改訂版である Palmer (1974, p.203; 1987², p.200) では、肯定文における <know+NP+(to) do> 型の生起を排除する見解は姿を消している。Hornby (1975, p.65) に示される通り、'ever' を含む疑問文、'never' 等を含む否定文、さら

には肯定文においてもこの構文は可能である。

IV

以上は現代の用法に関するものであるが、次に OED, MED, Visser (1973) Jespersen (1940), Mustanoja (1960) 等を手がかりに、史的観点から問題の構文を見てみよう。‘know’ が不定詞付き対格を従える ‘know+NP+(to) Verb’ は <know+NP+to be> 型, <know+NP+(to) do> 型ともに、中英語期以来用いられてきた構文である。これまで指摘された最古の用例は、<know+NP+to be> 型が14世紀後半、原形不定詞の <know+NP+do>型が13世紀中頃で、いずれも Visser (1973, §2079) に挙げられている。to-不定詞を伴う <know+NP+to do> 型は、Zeitlin (1908, p.84) の引用する14世紀初頭の例が最も古い。

c1374 Chaucer, *Boece* V, prose 6, 1901,
 when that god *knoweth* any thing to
 be, he ne unwot not that thilke thing
 wanteth necessite to be.

c1250 *Genesis and Exodus* 1935, Thei
knew him fro feran *kumen*.

a1325 *Cursor Mundi* 3478, And *knew*
 coueryng to com of care.

現代英語で to-不定詞を伴う <know+NP+to be> 型では、中英語・近代英語においても原形不定詞 ‘be’ が現れることは極めて稀で、to-不定詞が普通であったようである。⁵⁾ 他方、<know+NP+(to) do>型に関しては中英語期以来 ‘to’ 出沒の揺れが見られ、Visser (1973, §2079) は、大半は原形不定詞であるが to-不定詞も稀ではないとしている。

以上のことを念頭に置きながら、1961年の言語資料である LOB, Brown コーパスで、<know+NP+(to) do>型を中心に、‘know+NP+(to) Verb’ に関する現代英米語の実態を観察してみよう。

‘know+NP+(to) Verb’ のうち、‘to’ の出沒が問題となる <know+NP+(to) do> 型の能動形を最初に扱い、その後で、<know+NP+to be> 型の能動形と、両者の受身形についても簡単に触れることにする。

<know+NP+(to) do> 型の能動形

LOB, Brown コーパスにおける原形不定詞, to-不定詞の分布状況は次の通りである。

	原形不定詞	to-不定詞	
LOB	6	0	6
Brown	0	2	2
	6	2	8

英米で計 8 例に過ぎず限られたデータであるが、‘to’ の出沒に関する英米差が明瞭な形で現れている。原形不定詞はイギリス英語の LOB コーパスにのみ、to-不定詞はアメリカ英語の Brown コーパスにのみ起こる。LOB, Brown コーパスの全用例を下に示しておく。

原形不定詞の例

- (1) he added that he *had known* her stop at least seven people in one day, and *collect* a few coppers from each. (LOB B22 109)
- (2) I’ve *known* them *keep* this rival-chasing up for hours at a stretch when the chasee couldn’t, or wouldn’t, get away. . . . (LOB E15 159)
- (3) . . . , though I *have known* a producer *refuse* a commission because of the employment of what he thought an unsuitable principal singer. (LOB G43 078)
- (4) but I *have known* a good conductor

insist on what was arguably a ‘correctly’ fast pace when the singer was incapable of singing at that pace. (LOB G43 102)

(5) I *have known* a clever designer in another medium *hope* to use a film method of lighting on a stage. . . . (LOB G43 113)

(6) Ever *known* us *bowl* a wide about your service? (LOB N04 094)

to-不定詞の例

(7) I *have known* Papa *to exclaim* on getting his tax bill, “we’re going to the dogs!” (Brown G54 088)

(8) . . . and I’ve *known* her *to quarrel* with a plumber over a bill for fixing a faucet. . . . (Brown L15 128)

1961年当時のアメリカの書き言葉を資料とする Brown コーパスには、to-不定詞のみが起こり、原形不定詞の例はない。この傾向は今日のアメリカの書き言葉でも変わっていないようである。⁶⁾ 注意深い言葉遣いでは特に to-不定詞を用いるという Curme (1931) の見解については先に触れたが、アメリカ英語に関する限りその通りである。しかし、イギリスの書き言葉を資料とする LOB コーパスではすべてが原形不定詞であり、しかも、(1)が B の ‘Press : editorial’ というジャンル、すなわち、特に注意深い言葉遣いが要求されるジャンルに現れる例であることを考えると、イギリス英語ではアメリカ英語の場合とは異なり、注意深い言葉遣いにおいても原形不定詞がためらいなく用いられていることがわかる。

なお、(1)–(8)はいずれも完了形の例である。LDCE^{1,2}等は <know+NP+(to) do> 型が過去形でも起きるとしているが、LOB, Brown コーパスに関する限り過去形の例は皆無であ

る。わずかな用例から断定的なことは言えないが、やはり、<know+NP+do>型は主に完了形に限られるとする Quirk et al (1985, p. 1205) の見解は妥当であるように思われる。また、to-不定詞を用いる <know+NP+to do> 型についても同様のことが言えそうである。⁷⁾

また、(1)–(8)は、(6)だけが ‘ever’ を伴う疑問文で、他はすべて肯定文である。このことから、<know+NP+(to) do> 型の肯定文における生起を不可とする Palmer (1965, p. 169) の見解に問題のあることがわかる。Hornby (1975, p.65) に示された3つの可能性、すなわち、‘ever’ を含む疑問文、‘never’ 等を含む否定文、肯定文のうち、LOB, Brown コーパスでは8例中7例までが肯定文である。文脈によっては疑問文・否定文にも現れることは十分に予想され、我々のデータで疑問文がわずかに1例、否定文に至っては皆無という結果は単に偶然かもしれないが、少なくとも、肯定文での生起が決して稀な現象でないことは確かである。⁸⁾ 先に述べた通り、肯定文のみを用例として挙げる英米の辞書・語法書等が少なくないこともその証左となる。

次に、<know+NP+to be> 型の能動形についても簡単に触れておきたい。

<know+NP+to be> 型の能動形

イギリス英語の LOB コーパスに9例、アメリカ英語の Brown コーパスに7例、両者合わせて16例見られる。‘know’ の不定詞部に Be 動詞が現れる際、それはすべて to-不定詞であり、原形不定詞の例はない。なお、時制に関しては、現在形が6例、過去形が10例、完了形は皆無であるが、<know+NP+(to) do> 型の例が完了形のみであったことを思い起こすと対照的である。⁹⁾ 両コーパスより2例ずつ引用しておく。

(9) May I retract from my promise to

follow up on other subjects to deal with a matter which I *know to be* of interest to readers of this page? (LOB E14 128)

(10) moreover they *knew it to be* a cloud. (LOB F01 136)

(11) They would like to convey the notion something is being done, even though it is something they *know to be* ineffectual. (Brown A08 147)

(12) There was good fortune and there was bad and Philip Spencer, in handcuffs and ankle irons, *knew it to be* a truth. (Brown P07 146)

なお、‘know+NP+(to) Verb’の受身形は、LOB コーパスに22例、Brown コーパスに19例、計41例起こる。受け身の場合には、<know+NP+(to) do>型、<know+NP+to be> 型を問わずいずれの例においても to-不定詞が用いられており、原形不定詞は皆無である。¹⁰⁾ LOB, Brown コーパスより、<know+NP+(to) do> 型と <know+NP+to be> 型の受身形を1例ずつ挙げておく。

<know+NP+(to) do> 型の受身形

(13) On the other hand, the secret police *has been known to deal* ruthlessly with communist agitators. (LOB B20 102)

(14) I hate embarrassing silences and *have been known to make* a fool out of myself just to prevent one. (Brown G75 155)

<know+NP+to be> 型の受身形

(15) In his service he *was known to be* ruthless to incompetence, but he seldom had any difficulty in recruiting precisely the staff he needed. (LOB N01 156)

(16) Both men *are known to be* honest and public-spirited. (Brown B02 105)

V

以上、‘know+NP+(to) Verb’における不定詞標識‘to’の出没の問題を、イギリス英語のLOB コーパス、アメリカ英語のBrown コーパスに基づいて検討した。

<know+NP+to be>型では、英米の辞書・語法書等が説く通り、両コーパスにおいても to-不定詞のみが用いられ、‘to’の出没に関する英米差は全く見られなかった。<know+NP+(to) do> 型の受身形の場合も同様、英米ともに to-不定詞が現れる。

ところが、<know+NP+(to) do> 型の能動形では原形不定詞、to-不定詞ともに可能であり、‘to’の出没に関する揺れが存在する。しかも、その英米差は顕著な傾向を示し、原形不定詞はイギリス英語のLOB コーパスに、to-不定詞はアメリカ英語のBrown コーパスにのみ現れる。英米の辞書・語法書等によれば、イギリス英語における to-不定詞、アメリカ英語における原形不定詞の使用も皆無ではないようだが、少なくとも書き言葉に関する限り、一般的には、現代イギリス英語では原形不定詞、現代アメリカ英語では to-不定詞という図式が成り立つようである。なお、過去の経験を言い表す <know+NP+(to) do>型は、LOB, Brown コーパスではすべて完了形で、過去形は1例もなかった。過去形での使用を認める辞書もあるが、やはり、英米ともに完了形が最も一般的であると思われる。また、<know+NP+(to) do> 型は一般に疑問文と否定文に見られるとする辞書・語法書等もあるが、両コーパスでは8例のうち7例までが肯定文であった。疑問文・否定文の場合に比べ、肯定文での <know+NP+(to) do>型をことさらに稀であるとする見解は、現代英米語の実態に即していないように

思われる。

注

- 1) 田島松二・許斐慧二「コンピューター・コーポラ利用による現代英米語法研究(1)——‘prevent me (from) going’ と ‘prevent my going’——」『英語英文学論叢』(九大) 第43集 (1993) 所収。
なお、データ検索は、共同研究者の一人である許斐慧二氏 (九州工業大学情報工学部教授) にお願ひした。
- 2) Curme (1931, p.125) は引用例中に、次のような注を付けている。‘I never knew anyone *do* (usually *to do*) so much in so short a time (Mrs. H. Ward, *Miss Bretherton*, Ch. VII).’
- 3) Cf. Swan (1980, p.320), Evans & Evans (s.v. *know*), etc.
- 4) Quirk et al (1985) では、to-不定詞が用いられる <know+NP+to do> 型の時制に関する言及は特にない。
- 5) Cf. Visser (1973, §2079).
- 6) 共同研究者の許斐慧二氏が作成した、量的には Brown コーパスにはほぼ匹敵する1980年代以降のアメリカ英語の書き言葉のコーパスでは、該当例が6例ある。そのすべてにおいて to-不定詞が用いられている。
- 7) 上記注6) で触れたアメリカ英語コーパスでも、6例すべてが完了形である。
- 8) 上記注6) で触れたアメリカ英語コーパスでは、6例のうち、肯定文3例、否定文3例で、両者が拮抗している。疑問文の例はない。なお、LOB, Brown コーパスには否定文の例が起らなかったため、以下、否定文の用例を3例とも挙げておく。
(a) *I haven't known anyone to quit and I've been here twenty-six years.*
(b) *They had never known a black man to own theaters.*
(c) *The only people with doubts was the government and people who had never known anything like this to happen.*
- 9) 上記注6) で触れたアメリカ英語コーパスでは、<know+NP+to be> 型として、現在形が1例、過去形が2例、完了形が1例現れる。
なお、LOB, Brown コーパスでは、現在形の例はすべて、(9)(11)のように関係詞化されたものばかりであった。しかし、我々のアメリカ英語コーパスには次のような例もある。
‘... we know that runway, that victory march, *to be* the American catwalk of supreme bourgeois self-consciousness and supreme illusion.’
- 10) 上記注6) で触れたアメリカ英語コーパスには ‘know+NP+(to) Verb’ の受身形が15例起こる。<know+NP+(to) do> 型、<know+NP+to be> 型とも受け身の例はすべて to-不定詞である。

参考文献

- BBI= *The BBI Combinatory Dictionary of English: A Guide to Word Combinations*. Amsterdam: John Benjamins. 1986.
- Close, R.A. 1975. *A Reference Grammar for Students of English*. London: Longman.

- Curme, George O. 1931. *Syntax*. Boston : D.C. Heath.
- Evans, Bergen and Cornelia Evans. 1957. *A Dictionary of American Usage*. New York : Random House.
- Horndy, A.S. 1976. *Guide to Patterns and Usage in English*. 2nd ed. Oxford : Oxford University Press.
- Jespersen, Otto. 1940. *A Modern English Grammar*. Part V. Copenhagen : Ejnar Munksgaard.
- LDCE^{1,2}=*Longman Dictionary of Contemporary English*. Harlow : Longman. 1978, 1987.
- MED=*Middle English Dictionary*. Ann Arbor : University of Michigan Press. 1954—.
- Mustanoja, Tauno F. 1960. *A Middle English Syntax*. Part I. Helsinki : Soci t  N o-philologique.
- OALD⁴=*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*. Oxford : Oxford University Press. 4th ed. 1989.
- OED=*The Oxford English Dictionary*. Oxford : Clarendon Press. 1933.
- Palmer, F.R. 1965. *A Linguistic Study of the English Verb*. London : Longman.
- _____. 1974, 1987². *The English Verb*. London : Longman.
- Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech and J. Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London : Longman.
- Swan, Michael. 1980. *Practical English Usage*. Oxford : Oxford University Press.
- Zeitlin, Jacob. 1908. *The Accusative with Infinitive and Some Kindred Constructions in English*. New York : Columbia University Press.